



三春中学校だより

第 54 号

発行日 令和 2 年 1 月 31 日

発行所 三春町立三春中学校

電話 0247-62-2181 F A X 0247-62-6978

E-mail miharu-j@fcs.ed.jp

【教育目標】『三春に暮らす生徒一人ひとりに、将来に対して喜びと生きがいのある人生を主体的に創造する力を育み、地域に信頼され、ひいては、国際社会に貢献できる人材を育てる』

【“一生懸命”を楽しんできました！ ～第15回たむらバンドフェスティバル～】

1月26日(日)は、田村市文化センターにおいて、『第15回たむらバンドフェスティバル』が開催され、本校からも吹奏楽部のメンバーが、合同演奏会でお世話になっている『サウンド・オブ・ユニオン』さんとの合同演奏を披露してきました。

本校吹奏楽部は3年生が抜け、現在10名の部員で活動を続けています。先の全校集会では、子どもたちに、『三春中学校から音楽の灯を消してはならない』というメッセージをおくりました。その集会の中で紹介した詩が、吾一少年で有名な『路傍の石』の作者山本有三さんが訳をつけたドイツの詩人ツェーザル・フライシュレンの『心に太陽を持って』でした。

心に太陽を持って。
あらしがふこうと、
ふぶきがこようと、
天には黒くも、
地には争いが絶えなかりと、
いつも、心に太陽を持って。

くちびるには歌を持って。
軽く、ほがらかに、
自分のつとめ、
自分のくらしに、
よしや苦勞が絶えなかりと、
いつも、くちびるに歌を持って。

苦しんでいる人、
なやんでいる人には、
こう、はげましてやろう。
「勇気を失うな。
くちびるに歌を持って。
心に太陽を持って。」

そして、こうも伝えました。「敬老会、秋まつり、町音楽祭、入学式、激励会、文化祭、ミニコンサート、合唱コンクール、そして卒業式と、三春中学校にはこれまでもいつも身近に音楽がありました。音楽は人の心を慰め、勇気づけ、癒やし、結びつけてくれます。

合唱・吹奏楽部の顧問の先生には、三春中学校を美しい音楽・歌声にあふれるすばらしい学校にしていきたいと伝えてあります。私は音楽はできないけれど、みなさんがひたむきに、こころ豊かに、音楽に没頭している姿を見たり聞いたりするのが大好きです。三春中学校のみなさん、三春中学校から音楽の灯を消してはなりません。そう強く願います。」と。

吹奏楽部のみなさんが、少ない人数ながら、お兄さん、お姉さんと一緒に大好きな音楽・楽器の演奏に取り組んでいる姿を拝見し、“三春中学校に音楽の灯は明々と灯っている”ことを確信しました。

演奏している人たちも楽しいバンドフェスティバルでした。



【今日もありがとう！ ～一人でも、みんなでも、自らの信念を心に取り組みます。～】

繰替休業日あけの28日（火）は未明から降り出した雪が登校時間になっても降り続いていました。校門に行くのが少し遅れ、みんなが歩く幅1本分でも雪をかこうと雪かきを持って出かけるとさっぱりした頭をした生徒が一人で雪かきをしてくれていました。いつも同じ部活動仲間で雪かきをしてくれているメンバーでもありましたが、この日は朝早かったせいもありこの生徒さん一人でした。「ありがとう。」を声をかけると恥ずかしそうに、「はい。」と返事してくれました。

“みんなだどできるが一人では”ということではなく、“みんなでも一人でも”自分なりの信念をもって他とともに協調して行動できる力は、本当の『自立』にむけてとても大切な力だと思います。三春中学校のめざす『忠恕』『探究』『必達』の生徒像が確実に、着実に実現の方向へ向かっていることを確信しました。

三春中学校のすべての生徒のみなさんが、“人がいる、いないに関わらず”、“本当に大切なものを見極め”、“自分のためにも人のためにも”、“他と協調しつつ”、“適切な言動のできる”生徒に育ててほしい、そして、そうあり続けてほしいと願います。

「今日も雪かきありがとう。」



【“プロ”の仕事ぶり！ ～よい仕事（授業）をするために手を抜かず心を込めます。～】

1月30日（木）の4・5・6校時、1年生の技術科で木工作品を製作する学習を行いました。右の写真は、教科担任の先生が特別講師の佐久間さんとともに子どもたちにカンナの使い方を実技指導している場面です。

下の2枚の写真は、その前日の技術科教室の様子です。校舎内を巡回しているとき、3階の人気のない技術科教室から、「コリコリ、シュッシュッ。」という音が聞こえてきました。授業はないはずなのにどうしたのかな？と教室の中に入ってみると、先日紙上でもお知らせした木工授業の特別講師の佐久間さんが、授業で使用するカンナを、刃を垂直に立てたカンナ削り用のカンナで削っているところでした。「どうしたんですか？」と尋ねると、佐久間さん曰く、「カンナできちんと板を削るにはカンナの底が平らでないといけません。また、横幅が広すぎても引くときに力がたくさんいるようになります。明日、明後日の授業のため、カンナを使いやすくメンテナンスしているのです。」という答えでした。



プロの職人さんの心構え・心意気を見せられたような気がしました。よりよい木工作品をつくらせるためにカンナの底を削る。カンナの使い方を正しく学ぶ子どもたちに“本物”を提供する準備と努力を惜しまない姿勢、「仕事っちゃ、こうやるんだよ。」と教えられたような気がいたしました。

自分もそうありたいいなあ。仕事の中身は違ったとしても、お金をいただくプロとして、仕事に向かう姿勢はこうありたいいなあと思った出来事でした。